発行日：平成22年3月31日

大学美術教育学会 会報 NO.22

編集・発行　大学美術教育学会総務局広報室
理事長　橋本光明（信州大学）
総務局長　山田一美（東京学芸大学）
総務局事務部長　佐藤聡史
事務部　〒389－0403 長野県東御市東御牧原 1794－2
TEL. 090-2560-5998 ／ FAX. 0268-61-6162
E－Mail：daibibumon@po15.ueda.ne.jp
URL：http://saeu.arrow.jp/wiki.cgi

大学美術教育学会 会報

浅春から長春を願って

理事長　橋本光明（信州大学）

銀ねず，薄紅，萌黄と，色とりどりに草木の芽がふくらむ季節を迎えました。春暖への自然の律動には及ばないものの本学会の拡充を目指した改革もようやく浅春に向かう頃となりました。

４年前は，冬天深林の暗闇に立つ心境でした。手探りで細径を歩き始めましたが，このままでは，学会そのものも間違いなく彷徨い低迷すると直感しました。直面する学会の課題についての打開策を一刻も早く講じる必要性から平成19年11月の兵庫大会の最終日の総会におきまして改革案を提出し，承認されました。

当時の状況を思い起こすと，総会に出席されていた会員の皆さまが，やつぎばやの教育改革の下で美術教育にとっては悲観的な材料が増しており，何らかの打開策を学会に求めていました。そうした会員の皆様の気持ちと拙い私の改革への提言とが一致したからこそ平成 20 年度からの 2 年間に大ナタを振るうことができました。

しかし，もとより非力でありますから多くの方々にお力添えをいただきながらの立ち回りでした。とりわけて運営・組織面では，中核的な役割を担う総務局の局長及び部長，理事の全面的なご協力がなければ，未だに冬深き時期が続いたでしょう。初代総務局長の増田金吾氏，二代目の山田一美現総務局長，そして，山口喜雄部長はじめ新関，藤田，芳賀，三澤，大泉の２年間担当の各総務局理事，内田，小泉，竹内の新総務局理事の各氏に厚くお礼を申し上げます。また，総務局が企画・運営に専念できたのは，新しく導入した外部委託による事務処理が円滑に行われたからです。担当の佐藤聡史事務部長，柳沢愛部員には感謝の気持ちで一杯です。

運営・組織の大幅な見直しは，本学会の内と外への充実を図るためにありました。そのために欠かすことのできない近々の課題として学術団体の登録がありました。昨年の秋に申請書類が整い提出をしましたので 22 年度中の承認が得られるのを願っているところです。

本学会には，教科専門担当教員が多く所属していることからポスター発表を 20 年度の高知大会から試行し，21 年度の愛知大会からポスターセッションを本格的に実施しました。教科教育担当教員や学校教育で活躍されている教員なども含めた重要な制作活動・教育研究活動等の発表の場として定着させたいです。この発表の記録や報告の在り方についても今後検討をして本学会の特色の一つとして推し進めていきたいものです。

関連する学会誌については，たってのお願いで３年間務めていただいた佐藤哲夫前委員長と最後の就任となった西村俊夫編集委員長の時代から新たな学会誌委員会をスタートさせました。新委員長の大嶋彰副理事長に引き継いでいただきながら更なる充実をめざしています。査読者の登録制や査読システムの見直しなどによる質の向上を期待しています。

学会誌担当の副理事長を 1 名にすることで増田新副理事長には，他の事業や企画で手腕を発揮していただいています。その最初の取り組みが２月のフォーラム開催であり，今後の学会活動の多様な広がりが楽しみです。

春を招く歴史的な出来事として美術教育に関係する 3 学会（日本美術教育学会，美術科教育学会，本学会）の連携協力があります。昨年９月 12 日（土）に京都で開かれた３代表者（上記学会順：神林恒道会長，藤江充代表理事，橋本）による初会合で３学会による「造形芸術教育協議会」の設立を確約し，美術教育の重要性の啓蒙と存続，振興等で共通理解を深めました。

この結果，本年２月 11 日（木）に第２回の協議会が東京で開催され，３代表者に加えて学会順に大橋功氏，新関伸也氏の役員/金子一夫副代表理事/山田総務局長が出席しました。協議により別頁に示す事項に合意し，署名・捺印の文書を取り交わしました。

こうしてようやく春光に輝く学会が見えてきました。安堵の気持ちで退任できます。ご支援，ありがとうございました。

平成21年度日本教育大学協会全国美術部門協議会

第48回 大学美術教育学会
愛知大会　開催報告

愛知大会開催実行委員長　宇納一公（愛知教育大学）

ちょうど今から一年前，秋の大会に向けて高知大学からの引き継ぎを終えた我々は，東海地区の大学教員の方々に愛知にお集まり願い準備に入りました。一番の心配は会場候補地の選定でした。名古屋らしくしかも参加者の利便性も考慮して，愛知教育大学を第一候補に，名古屋市内の会議場も視野に調査検討を重ねました。若い先生方の提案と年配の先生方の意見は分かれ，しばらく不安は続きました。しかし，名古屋の中心地でやることに決めてからは運営組織の検討を重ね，あらゆる努力を惜しまず当日まで一丸となって準備をして，無事開催まで辿りつくことが出来ました。つくづく愛教大の教員の方々の頼もしさを思い知りました。大会会場では，東海地区の岐阜大学・三重大学・静岡大学の先生方には，研究発表の司会・大会のサポートの面でたいへんお世話になりました。

今回，私にとって一番の収穫は，若い先生方の提案でした。資金繰りや大会参加者の把握，会場設営から印刷物の手配，補助学生の教育からこまごまとした物品の手配や懇親会の内容の検討など感心することばかりでした。いつの間にか何をするにも用心深く慎重になっている私に対して，新たなことに挑戦する意欲を沸かしてくれたのですから。

この愛知大会では，役割ごとに担当者を決めて運営にあたりました。それぞれ分担した内容は次のとおりです。「本部総務局との連絡調整・大会運営総括・シンポジウムの企画」「書類作成・会計管理全般」「大会全体のデザイン・計画・概要集の編集やデザイン」「会場の準備・会場設営・大会当日のスケジュール管理・懇親会の企画と運営」「部門委員会の準備・研究発表の管理」です。また，愛知教育大学の大学院生と学部学生計16名が運営の補助にあたってくれました。

また愛知大会に関連する印刷物の一部は，今回協賛いただいたメーカーのプリンターを使って印刷させていただきましたが，このとき使用した大型プリンターもポスターセッション入口会場に展示していただき，参加者の方々にご覧いただくことができました。

部門総会の様子

運営スタッフの学生たち

大型プリンターのデモンストレーション風景

名古屋めし尽くしの懇親会場での理事長ご挨拶

口頭研究発表について

研究発表担当　鷹巣 純 （愛知教育大学）

愛知大会では，初めての試みとして，研究発表を３部門に分けて行なった。すなわち，ポスター展示，ポスターセッション，口頭発表，の３部門である。新規２部門については別項に譲り，ここでは従来から実施されてきた口頭発表について報告したい。

愛知大会での口頭発表は，44件の発表希望が寄せられ，全件発表していただくために９月26・27日の両日，各５会場を用意した。施設の構造上の制約で手狭な会場が多かったため，参加者の皆さんにはご迷惑をおかけすることもあったが，狭い分，発表者と聴講者の距離感が近く，熱心な討議を引き起こす効果もあったようである。

口頭発表者の内訳としては，大学関係者23名，現職学校教員７名（附属学校1名，一般校６名），大学院生・研究生20名であった（共同研究者を含むので合計は発表件数と一致しない）。将来の美術教育を担う若い学会員の活発な活躍があったこと，多忙さを増す学校業務の中で現職学校教員からも積極的な参加のあったことは，美術教育の未来にとって喜ばしいことである。

さて愛知大会では，大会実行委員会の業務省力化をはかり，申込み・発表要旨など口頭発表に関わるすべての通信・入稿をデジタルに一本化した。結果として少人数の担当者でも大きな混乱もなく業務が遂行できたわけだが，それは発表者の皆さんの好意的なご協力があったからこそのことである。そのことを記し，お礼申し上げます。

基調提案者からの説明風景

課題研究
「メディアと美術教育」の報告

課題研究担当　藤江 充（愛知教育大学）

９月 26 日（土），午後１時からデザインホールで開催され，最初にコーディネーターの藤江充（愛知教育大学）から，放送，情報機器，新聞，そしてマンガというメディアを使って実践されてきたパネラーから，子どもの生活をとりまくメディアと学校教育で活用できるメディアとをクロスさせる美術教育の可能性について提言を期待するという趣旨が説明された。

基調提案では「放送メディアと美術教育」と題して，NHK で主に教育番組を制作され，現在，大学でメディア教育を担当されている酒井和行氏から，放送番組というのは編集する人の意図が入ってしまうので教室のなかでどう使われるかを悩みながら考えたこと，疑似体験と実際の体験とのちがいを踏まえて美術教育とメディア・リテラシーとのあり方についての提案があった。上山浩氏（三重大学）からは，映像メディアを使った美術教育の世代的な変遷について述べられ，教員養成学部の授業で３Ｄムービーなど映像メディアを扱った授業実践や学生の作品が紹介され，美術教育における表現の可能性を拓くメディアの扱い方に関する提案があった。富山邦夫氏（愛知教育大学）からは，大学生の授業で NIE（Newspaper in Education：教育に新聞を）という新聞社とのコラボレーションの授業で「未来の教員へ向けての新聞活用」という「総合演習」の事例が紹介された。新聞は古いメディアではあるが，学生自身が新聞を作成することで，「取材力」，「調査力」などが身につき，デザイン教育の基礎にもなり，教員にも必要な力となるという提案があった。

塚越勇吾氏（名古屋市立・北陵中学校）からは，美術科授業で「マンガ」を取り上げ，いわゆるマンガ的な描写が生徒にとってなじみやすい表現手段であること，既成の４コママンガを１コマずつばらして，それらを組み合わせて自分でストーリーを創作していく導入の事例などを通して，マンガを美術教育で活用していくための提案があった。時間の関係で，フロアからの質問は少なかったが，実体験とメディアの疑似体験の関連などに関して質問があった。今回のシンポジウムは，さらに多様なメディアを使った美術教育の可能性を探る一つのきっかけになるであろう。

愛知大会でのポスター発表の試み

総務局理事　三澤一実　（武蔵野美術大学）

第47回大学美術教育学会高知大会で実験的に行われたポスター発表は，総会での論議を経て，翌年の愛知大会では試行という形で行うことが承認された。

総会での議論では，主にポスターの質の問題，則ち口頭発表と同等もしくはそれ以上の内容の質が保障できるのかという懸念と，一方では非会員を含め，特に現場教員の実践などをポスターで発表し学会の開放を進めたいという意見であった。この両者を勘案し，愛知大会では口頭発表と同等の位置づけであるポスターセッション部門と，ポスターを展示するのみのポスター展示部門の2系統で試みることとした。

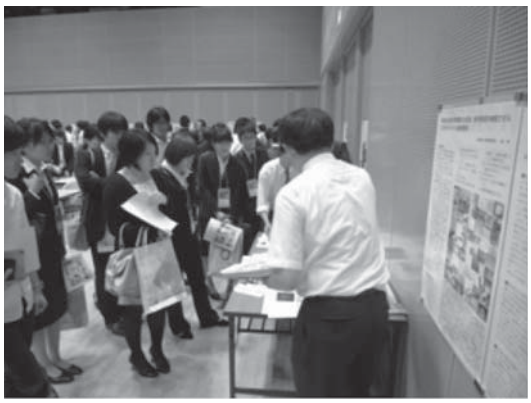
■ポスターセッション

「触れる彫刻制作・彫刻を楽しむ空間作り」
野村和弘（愛知教育大学 非常勤講師）
「造形ワークショップにおけるファシリテーション」
渡辺一洋（育英短期大学）
「中・大連携による鑑賞活動の可能性ー『旅するムサビプロジェクト』の成果ー」
鈴木斉（羽村市立第三中学校教諭）
「創造のきっかけを作るワークショップ『かいてみようシルエット』」
木谷安憲（東京芸術大学大学院・埼玉県立芸術総合高校）
「多様な生徒の興味関心を高め，制作意欲を継続させる50のオリジナル題材開発」
黒木健（秋田県立仁賀保高等学校教諭）
「芸術における地域文化の創造について」
渡邊晃一（福島大学）
「彫刻の鑑賞方法の提案とその実践」
奥西麻由子（埼玉学園大学非常勤講師）
「美術鑑賞教材『Visual Thinking Strategies』に関する考察」
渡部晃子（筑波大学大学院人間総合科学研究科博士課程芸術専攻）
「透明プラスチック素材の可能性についての研究　〜造形ワークショップの実践を通して　〜」
川原崎知洋（静岡大学教育学部美術教育講座）
「地域文化を創出するアートスペースの取り組み-KAPLコシガヤアートポイント・ラボの実践-」
浅見俊哉（KAPL代表/八潮市立八條中学校）
「現代アートな発想で思考の柔軟性を鍛える実践例」
加藤万也（愛知教育大学）
「色相環に収納する絵の具」
渡辺邦夫（横浜国立大学）

■ポスター展示

「けはいをきくこと…北方圏の森の思想Ⅱ-フィールドワークによる空間造形-」
坂巻正美（北海道教育大学岩見沢校）
「大学院授業における鑑賞補助教材開発の実践研究」
小池研二（横浜国立大学）
「子どもの造形活動における保護者のかかわりについて -東御市梅野記念絵画館の実践より-」
桜井弥生（ＮＡＧＡＮＯ・アートチャレンジ教室）
「桃山時代・江戸時代の陶磁器の絵柄の鑑賞について」
桜井剛（清泉女学院短期大学）
「社会に対し美術教育の価値を伝える活動を」
山崎正明（千歳市立北斗中学校教諭）
「山梨大学 井坂研究室における試み１・２」
井坂健一郎（山梨大学）
「視覚混合を表出する絵画技法についての一考察」
桶田洋明（鹿児島大学教育学部美術教育講座）
「児童のイメージ形成と学習環境とのかかわり」
大島孝明/（富山大学人間発達科学部附属小学校・富山大学大学院）
「飛翔する鳥『無限連続パズル』」
渡辺邦夫（横浜国立大学）
「つながりから広がる子供の創造世界」
大杉健（府中市立若松小学校）

合わせて，22件40枚のポスターは内容も充実しており，またセッションでは発表者に対する質問も後を絶たず盛会となった。発表者と参加者の関係が近づき好評であった。今後も引き続き実施したい。



活発な討議が交わされたポスターセッション

委員会 活動報告

平成21年度学会誌委員会報告
ー学会誌編集一年目を終えるにあたってー

学会誌委員会 委員長　大嶋 彰 （滋賀大学）

学会誌委員長の職務に就いて，瞬く間に一年が経とうとしています。振り返って，その職務の遂行については反省すべきことが多くありました。これまでの編集委員会の廃止に伴って，事務部との連携を円滑に行い，その役割分担を明確にするというのが私に与えられたミッションなのですが，この一年はまだ手探り状態であったというのが実状でした。しかしこれは，当初から分かっていたことですので，初年度を乗り切れれば今後はもう少しうまく運営できるのではと思っております。とは言え，論文投稿者の方々には，スケジュールの遅れなどもあり，ご迷惑をお掛けしましたことをこの場をお借りしてお詫び申し上げます。また，事務部には膨大な作業をしていただき誠にありがとうございました。

さて，本学会の副理事長は，この学会の特性を考慮し教科教育と教科専門の双方から当てることを旨としています。部門を基盤として，多様な専門を抱える本学会は，その多様性をいかに引き出すか，そして，多種多様な論文が競合，共存できるよう配慮し，そのことによって斯学の発展に資することがこの学会誌に与えられた使命かと考えています。しかし，この使命が果たしてうまく機能しているかどうかは将来の判断に委ねるしかないと思いますが，この共存全体が醸し出さねばならないエートスは意識できるのではないかと思います。急激な近代化が終焉し，新たな時代への痛みさえ伴った過渡的な現在は，おそらく人々が考えている以上に美術教育を必要としているようにも思えます。現在の美術はあまり健康的だとは思えませんが，何度も何度も原点に帰り，なぜ美術教育が必要なのかを問うこと，この問いが学会誌全体を支えるエートスになればと思っています。

美術の現在は，我が国の裏面と文脈を欠いた白々しい表面を，えぐるように表しています。これは子どもの現在も同じだと思います。美術教育の学会が問わなければならないことは，まずこのことからなのではないかと感じています。

平成21年度国際交流委員会報告

国際交流委員会 委員長　山口喜雄
（宇都宮大学）

1　本委員会の議事【敬称略50音順】

第１回　2009年6月13日（土）　東京学芸大学

出席：安東恭一郎，向野康江，竹内とも子，中村和世
浜本昌宏，山口喜雄

1）本年度の委員会活動方針の検討
2）中国内陸部学校訪問計画〔現地事情で再検討〕
3）事務局の年度ごとの輪番制，２名一組で担当
21年度担当：安東・向野2009.6.13～2010.6.中旬
4）機関誌『国際交流情報』刊行
5）総務局から竹内委員（東京・九段小）の加入
6）その他：①委員の任期の要検討。②中村・福本委員の辞退承認。③『国際交流情報』創刊号は第２号は留学生特集とし，情報の相互交流を図る。④他。

第２回　9月25日（金）名古屋・ナディアパーク

出席：池内慈朗，向野，鈴木幹雄，煤孫康二，山口

1）『国際交流情報』の創刊（2009.8.10発行）
17記事を全14委員が執筆。第2号（2010.1.7）の特集は〈アジア地区〉日本在学留学生事情と委員募集。
2）本委員任期３年
特別な理由がない限り再任を妨げないとする。欠席委員へのメール稟議で確定。
3）委員を若干名公募し，15名程度に
希望者は業績を本委員会に提出，審査の上，決定。

第３回　2010年3月14日（日）東京学芸大学 予定

■『国際交流情報』創刊号

■『国際交流情報』第２号

※本委員会へのご意見、『国際交流情報』第３号への投稿や特集記事のテーマ等を募集しています。

2月フォーラム報告

第１回学会・部門合同フォーラム
２月開催・フォーラム報告

去る２月28日（日）13:15〜16:50，お茶の水女子大学附属中学校で，大学美術教育学会と日本教育大学協会全国美術部門の合同フォーラムが開催されました。雨天にも拘らず60名以上もの参加がありました。

挨拶・趣旨説明

冒頭，橋本光明理事長と増田金吾副理事長から本学会及び部門の誕生と変遷，加えて近年の問題点とその解決策としての組織改編，更にフォーラムの主題である「教科内容学」の研究経緯が述べられ，本フォーラムの開催意図が示されました。その上で，私たちには「明日を創る美術教育」即ち，真の教員養成を考える使命があるということの確認が行われました。

第１部「大学・学部における美術教育のゆくえ」

初めに，コーディネーターの福本謹一先生から，テーマの設定の背景が述べられました。教員養成学部の専門性は「子供達の発達段階に応じて子供の興味や関心を引き出せる能力」を育成する点にあり，それは「教科教育学」と「教科専門」の融合によって可能になると考えられるが，現在，教科内容学或いは教育実践学等の名称でそうした研究が始められているものの，未だ確立には至っていないことが語られました。更に，教科内容学構築のためには，｛教育，表現，美術，子ども｝の４つの論理が必要であり，学習者の認識的側面を示す「子ども」を視野に入れる必要性が提案されました。

これを承けてパネリストの小澤基弘先生は，大学の表現領域担当教員が行い得る「教科内容学」には，制作の実感を言葉にして語る「制作学」や，表現や技巧の歴史及び美術史等を解説する「絵画学（彫刻学等）」があることを紹介されました。但し，全国の大学の表現科目のシラバスを分析すると，これらに相当する内容を見付けることが難しい現状も挙げられました。

藤江充先生からは，初期の教科教育が教科専門の教員によって行われていたことを拠に，教科教育（A）と教科内容（B）の関係として｛A⊂B，A⊃B，A∩B，A∪B)｝等が示され，教科内容学の位置付けを確認する必要性が指摘されました。また工学部のJABEE（日本技術者教育認定制度）の様な，学生の資質や能力の質を保証するための教員養成のスタンダードを考えることの重要性も述べられました。最後に，スタンダードを作ることが正に教科内容学に今求められていることであり，スタンダードが作られると現在「子ども」に限って問われている「資質や能力」が，子どもを教える教員とその教員を養成する大学教員においても問われ，結果，教員養成の充実に通じるとの総括がなされました。

質疑では，言葉が難しかったという感想の他，現在の教員養成の実態はかつてとどこが違うのかとの質問があり，変わっていないからこそ改善のためにも教科内容学の構築が急務であるとの回答が，具体例と共にパネリストの石井壽郎先生から熱く語られました。

第２部「造形活動を通したコミュニケーション力（りょく）」

三澤一実先生をコーディネーターとし，大成哲雄先生，中平千尋先生，佐藤哲夫先生をパネリストとして，アートプロジェクトを手掛かりにした造形の持つコミュニケーション力についての討論が行われました。

ふんだんな画像によって会場に再現されたアートプロジェクトは，各々村人が参加，中学校が舞台，大学生が企画といった特徴を持つものでしたが，時に笑いを誘いながら詳細が紹介され（何故か揚も射して来て），プロジェクトの拓く可能性が分析されました。そこでは個人の能力を発揮する場を創出し，自己発見により自己肯定感を抱かせ，コミュニケーション（相互承認）を生むといった可能性が挙げられました。

最後に三澤先生から，現代が強く求める他者と関わる能力を育成するためにもアートプロジェクトは有効であることが確認され，更に，この人と人との交わりを可能にする造形の力を用いて，力業ではなく調和によって大きな力を発揮するオリンピックの団体スケート競技の様に，１つの領域にこだわらず，互いに絡み合って未来の美術教育を作り出して行くことが大切であると司会の山田総務局長が付け加え，長時間に亘るフォーラムが幕を閉じました。

（総務局広報室　内田裕子）

熱気のこもった協議が行われたフォーラム

細則の改訂について（お知らせ）

細則の改訂について

承認された「会員の会費に関する細則（改正案）」

去る2010年3月14日開催の拡大理事会にて，総務局から提案された「会員の会費に関する細則（改正案）」が承認されましたのでご報告致します。

「会員の会費に関する細則」

（2010年3月14日，拡大理事会承認）

第１条　本会則は大学美術教育学会会則第3条における会員が納入する会費について規定する。

（年額）

第２条　会員会費は以下のとおりとする。

①正会員　　年額　5，000円

②賛助会員　年額　10，000円（一口）

（納入期限）

第３条　会員会費は原則として所定の郵便振込用紙により，毎年度6月末までに納入するものとする。ただし会報等に別の期限が指定されていた場合には，それに従うものとする。

（滞納者の納入）

第４条　第3条に規定する納入期限を過ぎて会費が滞納されている場合は，以降すみやかに納入するものとする。また別に事務部から督促がある場合は，督促に定められた期日までに納入するものとする。

（過年度滞納者の納入）

２．事務部からの督促にかかわらず，当該年度の会費が未納のまま翌年度になった場合は，第3条に規定された納入期限までに合算して納入するものとする。

（退会時の会費納入）

第５条　第3条に規定する期限までに退会届を事務部に提出した場合は，当該年度の会費は納入しなくてもよい。ただし前年度までに滞納がある場合はそれを納入する。

（滞納による会員資格の喪失）

第６条　前々年，前年の会費を滞納し，当年において第3条の納入期限を経過し，かつ会則第6条に規定された退会意思の表示がない場合は，会員資格を失うものとする。

附則　本細則は平成4年4月1日より施行する。

平成4年11月26日一部改正
平成11年10月8日一部改正
平成22年4月1日一部改正

拡大理事会
（2010. 3. 14 ／ 於：東京学芸大学）

平成 22 年度 運営体制について

平成22年度 運営体制

拡大理事会にて次期学会理事長選考結果報告承認される

次期学会理事長・部門委員長選考委員長
大宮康男（静岡大学）

この三月末日をもって任期二年，総じて四年の永き期間，部門委員長・学会理事長を務められた橋本先生が役を退くこととなりました。私も部門副委員長として微力ながらお付き合いをさせていただきましたが，思えば，この四年間は橋本先生が，大鉈を振るって部門・学会の改革を実行されたことに尽きると思います。

ここ数年間は大学にとっても大きな変革の時期であり，教員養成系大学も例外ではなく，いわゆる「あり方懇」などにより，変革を求められてきました。そのような時期にあって部門・学会は旧態依然としたままで，橋本先生の改革はこの旧態依然とした部門・学会の無駄を省いてスリム化し，実情に合わせて合理化しようとしたものです。その最大の成果は総務局の新設でしょう。組織の中に総務局を置くことで部門・学会が一気に活性化し，そこから出てきた成果がホームページの開設と学術団体への登録です。また，従来九ブロックに分かれていた地区を五ブロックとしたことで，大学美術教育学会全国大会の開催校の負担を減らし，私学参入の道も開けました。さらに教科内容学検討委員会が立ち上がり，二月末日には念願の「フォーラム」開催に漕ぎつけました。こうした成果の一方で無駄な制度は削除されていきました。たとえば「名誉会員」（籍を置くだけで何もしなくても自動的に名誉会員になれる制度）と「幽霊会員」（籍を置くだけで何もしない会員や会費さえも支払わない会員）の廃止です。このおかげで会費の回収率が上がりました。ほかにも細かいところを挙げればきりがありませんが，私の感じた改革の主だったところは以上のようなところでしょうか。

ただ，こういう改革はやりっぱなしではだめで，次の体制がさらにこれを維持・継続してゆくことが重要なのです。幸い，次期部門委員長・学会理事長は愛知教育大学の藤江先生に決まりました。藤江先生は他の美術教育，造形教育の学会や研究会にも精通しておられ，次期部門委員長・学会理事長には最適の方です。

この四月からは部門・学会は新体制でスタートすることになるわけで，橋本先生には「永い間部門委員長・学会理事長を務められてお疲れになったでしょう。」というねぎらいの言葉をもって部門委員長・学会理事長を勇退していただきたいと思います。

平成22年度 大学美術教育学会 地区代表理事・私学代表理事・大会運営理事

平成22年3月14日開催の拡大理事会において，以下の方々が承認されました。（H22. 3. 23現在）

○地区代表理事

Ⅰ
〔北海道〕 前田英伸（北海道教育大学岩見沢校21-22年度）
南部正人（北海道教育大学旭川校22-23年度）
〔東　北〕 立原慶一（宮城教育大学21-22年度）
片野　一（福島大学22-23年度）

Ⅱ
〔関　東〕 相田隆司（東京学芸大学21-22年度）
渡辺邦夫（横浜国立大学22-23年度）

Ⅲ
〔北　陸〕 郷 晃（新潟大学21-22年度）
木村　仁（信州大学22-23年度）
〔東　海〕 竹井　史（愛知教育大学21-22年度）
上山　浩（三重大学22-23年度）

Ⅳ
〔近　畿〕 鈴木幹雄（神戸大学21-22年度）
加藤可奈衛（大阪教育大学22-23年度）
〔四　国〕 杉林英彦（愛媛大学21-22年度）
未　　定（四国地区22-23年度）

Ⅴ
〔中　国〕 高橋正訓（島根大学21-22年度）
河野令二（山口大学22-23年度）
〔九　州〕 桶田洋明（鹿児島大学21-22年度）
幸　秀樹（宮崎大学22-23年度）

○私学代表理事

山中　隆（華頂短期大学21-22年度）
水島尚喜（聖心女子大学22-23年度）

○大会運営理事

大坪圭輔（武蔵野美術大学21-22年度）
立原慶一（宮城教育大学22-23年度）

平成 20 年度 事務報告

平成20年度 事業報告

［平成20年］

4月上～中旬　役員及び総務局理事委嘱交渉

4月26日　第1回総務局理事会、総務局拡大理事会（東京文化会館）

5月18日　第2回総務局理事会（淡交社　東京支社）

6月21日　第1回学会理事会，拡大理事会（東京文化会館）

学会誌委員会，国蕨交流委員会の各委員会の開催（同上会館）

6月30日　第47回大学美術教育学会「高知大会」第1次案内及び学会通信発送，

平成19年度学会会員名簿刊行，発送

8月上旬　学会ホームページ開設

http://saeu.arrow.jp/wiki.cgi（試行開始）

9月16日　投稿論文提出締切（登録締切8月8日）

10月10日　大学美術教育学会「高知大会」事前申込締切

10月13日　第3回総務局理事会（東京学芸大学）

11月 1日　平成19年度会計監査、第2回学会理事会学会誌委員会、国際交流委員会等開催（高知大学）

第１回全美協役員との合同協議会（理事長、総務部長等数名出席）

11月2日　大学美術教育学会「高知大会」開催（高知大学）

開会式課題研究、公開シンポ、研究発表，合同懇親会

11月3日　研究発表・学会総会，閉会式　大会開催大学引継ぎ（高知大学―愛知教育大学）

11月28日 掲載論文提出締切

12月4日　学会誌編集作業開始

12月中旬 日本学術協力団体申請準備

［平成21年］

1月31日　第4回総務局理事会（東京学芸大学）

3月13日　第3回学会理事会、学会誌委員会、国際交流委員会等各委員会、美術教育における教科内容学の検討WG同日開催（東京文化会館）

3月20日　平成20年度学会会報No.20刊行

3月25日　学会誌第41号刊行

平成 20 年度 決算報告

平成21年9月25日

平成20年度大学美術教育学会決算書

	収入				
	費目	平成20年度予算	平成20年度決算	増減	備考
1	前年度繰越	1,066,436	1,066,436	0	
2	会費収入	3,250,000	3,055,000	−195,000	611名
3	学会掲載負担金	1,250,000	1,200,000	−50,000	48名
4	受取利子	600	620	20	
5	収入合計	5,567,036	5,322,056	−244,980	
	支出			0	
6	研究大会補助金	50,000	50,000	0	
7	研究大会特別補助金	0	0	0	
8	概要刊行費	300,000	300,000	0	
9	学会誌刊行費	2,800,000	2,450,960	−349,040	
10	学会会報刊行費	100,000	44,000	−56,000	
11	学会通信刊行費	40,000	0	−40,000	
12	会員名簿刊行費	0	0	0	
13	学会封筒印刷費	0	46,920	46,920	
14	国際交流補助金	40,000	0	−40,000	
15	講演会等分担金	0	0	0	
16	運営委員会費	100,000	12,960	−87,040	
17	理事会費	100,000	91,524	−8,476	
18	学会誌委員会	50,000	87,160	37,160	
19	委員等経費	250,000	220,700	−29,300	
20	拡大理事会補助金	50,000	0	−50,000	
21	交通費	400,000	351,720	−48,280	
22	通信費	200,000	155,430	−44,570	
23	事務費	500,000	0	−500,000	
24	雑費	50,000	16,809	−33,191	
25	予備費	537,036	0	−537,036	
26	事務部業務委託費	0	385,000	385,000	
27	支出合計		4,213,183		
28	次年度繰越		1,108,873		

平成20年度 会計監査報告

大学美術教育学会
理事長　橋本光明　様

平成20年度大学美術教育学会の会計につき、平成21年9月14日に、監査委員会を開催し、会計監査を実施しました結果、

1　収支について伝票類と帳簿類を対照監査した結果、それらが正確に仕分け、記帳されておりました。
2　収支の伝票類と帳簿類は整理され、収支の内容・使途も明確に記帳され、会計が適切に処理されていました。
3　帳簿差引残高及び貯金・現金残高と決算書との対照も行いましたが、正確であることを確認しました。

以上、平成20年度会計処理、決算が正確に行われたことを報告いたします。

平成21年9月14日
大学美術教育学会
監事　上野　行一　印
監事　石川　誠　印

※付記
・上記、決算報告書並びに監事による報告は、平成21年9月27日開催の第48回大学美術教育学会総会において、承認されております。
・実際の会計監査報告には，監事の署名と押印があります。

三学の矢の纏まり

理事長　橋本光明

巻頭で報告しました３学会（日本美術教育学会，美術科教育学会，本学会）による「造形芸術教育協議会」の合意事項は，下記のとおりです。

記

1．本協議会の名称を「造形芸術教育協議会」とする。
2．本協議会は，美術教育関連の組織が結集して，美術教育を振興していくことを目的とする。
3．本協議会は，当面は，３つの学会（「日本美術教育学会」，「大学美術教育学会」，「美術科教育学会」）によって構成される。
4．本協議会は，原則として年に１回は開催し，３学会の代表者等が集まり，連携の具体を協議する。そのために，各学会組織に本協議会担当者（学会役員兼任）を置き，活動費を予算化する。
5．本協議会を構成する学会は，それぞれの全開大会や研究会等に関する情報を交換し協力する。

2010年2月11日
大学美術教育学会理事長　橋本光明
美術科教育学会代表理事　藤江　充
日本美術教育学会会長　神林恒道

上記の合意事項に基づいて各学会間での連携・交流事業について協議した結果，下記の３点が合意された。

1．本協議会を構成する学会の会員が，他の学会の主催する全国大会や研究会等に参加する場合には，それぞれの学会の会員に準じて参加できるように配慮する。
2．原則として年１回は，本協議会を構成する学会が共催して美術教育関連の研究会等を開催する。
3．必要に応じて「造形芸術教育協議会通信」（仮称）などの本協議会の広報誌を発行する。

３学会の長きに亘る輝かしい活動や多くの業績からみれば，一本の矢であっても容易く折れることはありませんが，三本の矢が纏まることで美術・芸術教育の一層の振興発展に寄与することができ，教育研究においても新たな取り組みの可能性が考えられます。会員の皆様のご協力と斬新な案のご提供をお待ちしています。

平成 22 年度 第 49 回学会 東京大会について

第49回大学美術教育学会
東京大会に向けて
～ 2010年9月19日，20日

大会実行委員長　三澤一実（武蔵野美術大学）

現在、東京大会に向けて鋭意準備中です。本大会は、学会初の私立大学開催です。多くの方々にご参加いただき、今日の美術教育を取り巻く情勢や課題等、美術教育に関して多くの議論と、収穫をもって大会の成果と致したいと考えています。

大会運営は教大協美術部門関東支部の大学の協力を得て協働で運営しています。

今日、多忙となりつつある大学業務の中で、大会運営の業務を各大学に分散し、開催大学の負担を軽減しながら協働で運営にあたるスタイルも、これからの学会運営のあり方として提案できるのではないかと考えます。また、大会準備状況も、逐次ブログにて公開していきます。会員以外の方にも学会に興味を持っていただきながら、多数の参加があるよう努力していきます。その上でも、開かれた学会を目標に運営にあたります。

今回、特筆できる点をいくつか紹介したいと思います。**（次頁のタイムテーブル(案)もご覧ください）**

■シンポジウムの工夫

1日目午前より４つのシンポジウムを同時開催します。シンポジウムの内容は美術教育における今日的な課題を選びました。そして各シンポジウムで出た話題等を担当コーディネーターがまとめ、午後のパネルディスカッションで討論していきます。

シンポジウム①「教科内容学は教科の未来を語れるか（仮）」では、埼玉大学の小澤基弘先生がコーディネーターを務め、教大協の「教科内容学検討委員会」で議論されてきたこと、また新たな意見を入れつつ、美術教育における教科内容の再点検と美術教育の意義について議論を展開していく予定です。

シンポジウム②「美術教育の新たな動き-アートプロジェクトを中心に-（仮）」では、コーディネーターを千葉大学の神野真吾先生が務めます。今日、盛り上がりを見せるアートプロジェクトの中に、教育としての役割と可能性を探っていく予定です。

シンポジウム③「全国美術教育学生会議（仮）」では、美術を学ぶ学生が、大学で何を学び、美術をどの様にとらえているか、大学生がパネラーとなり大学での学びを中心にディスカッションを深めてきます。コーディネーターは群馬大学の林耕史先生です。

シンポジウム④では「美術教育における幼年時教育の役割（仮）」と題し、就学前の幼年時教育の今日的課題及びその役割を明らかにしていきたいと考えます。コーディネーターは、大橋功先生です。各シンポジウムの詳細についてはブログをご覧下さい。

そして、午後に、これら４つのフォーラムから出た意見を各コーディネーターが持ち寄り、幼年時教育から社会教育まで、人の一生において美術の果たす役割を美術教育の視点から考えていくパネルディスカッション「美術教育の明日を考える」を開催します。こちらは茨城大学の小泉晋弥先生の進行で行います。

■ポスター発表

愛知大会での試行を踏まえ、東京大会でもポスター発表を行います。発表者と参加者と近い関係で議論できるポスター発表もご利用下さい。会期期間中展示されます。

■ブログによる大会案内

随時、大会準備の情報を掲載していきます。関心のある方々や学生にご紹介いただきながら、多くの方の参加につながるよう皆様のご協力宜しくお願い致します。

今回の東京大会は9月19日（日）20日（祝・月）という早い時期に開催されます。口頭発表等の申し込み等も7月中を予定しております。皆様早めの準備を宜しくお願い致します。なお、参加申し込みに関しても、参加費の早割を検討中です。下記ブログにて随時ご確認下さい。

大勢の皆様のご参加をお待ちしております。

URL:　http://daibi.exblog.jp/
第49回 大学美術教育学会東京大会
（武蔵野美術大学）

平成 22 年度 東京大会

事務局より

事務局長　佐藤聡史

1　年会費は会則に納入期限が定められていますので，期限までに納入していただくようお願いいたします。何回もご連絡を入れ，年度末になっても会費の督促を出している現状です。本年度会費は，５月～６月に郵送する全国大会（東京・武蔵美）案内に同封され，期限は７月末を予定しています。延滞のないようお願いいたします。また今までに未納分のある方は，同時に未納分を合算していただきます。

2　個人情報に変更があった場合は，必ず事務部へ変更の連絡をお願いいたします。住所，電話，勤務先，職名のほか，メールアドレス変更は重要ですのでご協力ください。また所属先で，退職，異動の方へ郵送物が届いた場合には，お気づきの方から事務部へご一報ください。

3　２月上旬に会員名簿を，３月末に学会誌を郵送しております。万が一お手元に届かない方は連絡をお願いします。また，学会誌については若干の在庫がございます。必要な方には１部 3,000 円にて頒布しますので，事務部へ連絡ください。バックナンバーについても受付いたしますが，対応に時間がかかる場合もございます。

4　09 年度大学美術教育学会名簿の内容に訂正がございます。訂正いたしますとともにお詫び申し上げます。

P15　武末裕子さん　所属など記載漏れ

追記　所属：松本市美術館　職名：学芸員　専門分野：彫刻，美術教育

P17　吉田貴富さん　掲載順に間違え

訂正　「よ」のページに記載

P18 富山祥瑞さん　市外局番間違え

誤：０５６５　正：０５６６

P21　樋口一成さん　市外局番間違え

誤：０５６５　正：０５６６

P22　藤江　充さん　市外局番間違え

誤：０５６５　正：０５６６

5　平成 21 年度新規入会者の紹介

本年度大学美術教育学会に新たにご入会された皆様です。所属等は名簿をご覧ください。

浅野卓司，石橋碧依，井田勝己，伊藤智里，井ノ口和子
大島孝明，大杉　健，大坪圭輔，岡田京子，岡本昌己，北澤俊之
木谷安憲，倉科絵美，小出美慧，今　香，櫻井由希子
佐野真知子，佐原　理，塩井一孝，神保　悠，鈴木　斉
鈴木光男，関根史恵，多鹿宏毅，立川泰史，田中聖子
張　雅晴，辻　誠，土屋敦資，鶴野俊哉，手塚千尋
土井敬真，富田俊明，直井　崇，長田謙一，永渕泰一郎
野田俊司，野津義輝，畑中朋子，平野英史，藤原逸樹
二木　遥，穂積利明，本多正直，牧本真哉，宮下　聡
薬本武則，吉澤　俊，阿部鉄太郎，阿部宏行，井川　健
大岩幸太郎，緒方信行，片口直樹，加藤逢之，竹田園子
速水敬一郎，蛭田　直，古草敦史，前田英伸，渡邉美香

（以上 61 名）

平成22年度日本教育大学協会全国美術部門協議会 ・ 第49回大学美術教育学会タイムテーブル（案）

9/18（土）				
12：30～	受　付			
13：00～18：00	全国美術部門会議、拡大理事会、各種委員会 / 全美協総会　/ 大学部会 [詳細は次案内]			
18：00～20：00	懇親会　12号館MAU食堂			
9/19（日）				
9：00～	受　付			
9：30～9：50	教大協部門総会			
9：50～10：20	教大協部門協議会「平成２１年度教科内容学検討委員会のまとめと論点整理」			
10：25～10：35	第49回大学美術教育学会開会式			
移動				
10：45～12：10	シンポジウム①	シンポジウム②	シンポジウム③	シンポジウム④
	教科内容学は教科の未来を語れるか ＊コーディネーター小澤基弘（埼玉大学）	美術教育の新たな動き-アートプロジェクトを中心に-＊コーディネーター　神野真吾（千葉大学）	全国美術教育学生会議「大学の美術教育を考える」＊コーディネーター　林耕史（群馬大学）	美術教育における幼年次教育の役割　＊コーディネーター大橋功（NPO学習開発研究所副代表）
12：10～13：00	昼休み　協賛各社展示　12号館フロア			
13：00～14：25	パネルディスカッション「美術教育の明日を考える」 シンポジウムコーディネーターがパネラーとなりテーマについて提案する。 ＊コーディネーター小泉晋弥（茨城大学）パネラー 小澤基弘×神野真吾×林耕史×大橋功			
移動				
14：30～14：55	ポスター発表			
移動				
15：00～15：30	口頭発表　5室×6コマ			
15：30～16：00				
16：00～16：30				
16：30～17：00				
17：00～17：30				
17：30～18：00				
18：10～20：00	懇親会　鷹野台ホール			
9/20（月）				
8：50～9：20	受　付			
9：20～9：50	口頭発表　5室×6コマ			
9：50～10：20				
10：20～10：50				
10：50～11：20				
11：20～11：50				
11：50～12：20				
12：30～13：30	学会総会　＊			

＊会員以外の非会員もオブザーバー参加できます。出席者には軽食がでます。

「学会会報・第 22 号」

総務局広報室
○大泉義一（横浜国立大学）
・小泉　薫（お茶の水女子大学附属中学校）
・芳賀正之（静岡大学）
・内田裕子（埼玉大学）
・山田一美（東京学芸大学）